

(一 統)

號五十四百二第  
可認物便郵種三日四十二月二年十三治明  
(行發日五十月每)行發日五十月七年四正大

# ▲思想の界の教書▲

◎法華經講義  
本多日生師著

◎如來壽量品講演輯  
本多日生師講義

◎精神の修養——思想の調整  
軍事教育會發行

◎軍神加藤清正公  
陸軍少將 小原正愷著

◎立正安國論略解  
マスター、オゲ、アツツ柴田一鹿著

◎縮法華經並開結  
刷

◎橘香集

◎勤行作法

洋裝二千頁定價金四圓なるも特價金參圓と郵  
税十六錢を以て提供す

壽量品の大意を知らざれば一代佛  
教の中心を知らざるもの也佛敎の  
活力眞價は壽量品にあり讀め大  
に讀み佛陀の眞精神に接觸せよ

内容豊富立論堂  
々近代の快文字  
なり

清正公の人格及宗教的信仰を知ら  
んとするものは先づ本書を讀まざ  
る可らず施本用に尤も適せり

第一版已に賣切れ再版出来△日蓮主  
義と國家との甚深なる交渉を知らん  
ずるものは須らく本書を讀むべし本  
書は通俗的に能く之を理解せしむ袖  
珍美本にして百十頁の内容あり

菊判半截携帶に尤も便  
なり

日蓮上人の遺文拔萃にして研究順  
序の指南あり

信仰者が朝夕の修行は嚴正にして  
謬りなきを要す本書は日蓮門下を  
通じて齊しく奉行すべき作法を示  
したる教典也

定價金廿五錢  
郵税金四錢

上下二卷  
郵税金四十八錢

十部郵税金共  
割引十五錢に共

一部郵税金  
金十錢  
郵税金二錢

紙製二十錢 稅四錢  
布製天金四十五錢 稅六錢

一部郵税金  
郵税金貳錢

一部金五錢  
四部金二錢  
郵税金二錢

販賣所 東京小石川白山前町七番地 三上義徹  
〔振替東京二八八四〇番〕

大正四年八月十五日發行(毎月一箇十五日發行)

## 時代の要求と日蓮主義

大僧正 本多 日生

### ▲讀者訪問録▲

▲竹内豐子女史▲岡田本所區  
長▲日蓮正宗法道會▲

### 自殺防止論

三上義徹

### の研究上三大祕法抄綱要

日蓮主義傳道記事

# 統一

號六十四百二第

號月八

## 國民性 日蓮主義

の修養と

子爵 五島 盛光



# ▲思想の界教書▲

◎法華經講義  
本多日生師著

◎如來壽量品講演輯  
本多日生師講義

軍事教育會發行

◎精神の調整の修養——思想  
内容豊富立論堂々近來の快文字なり

◎軍神加藤清正公  
陸軍少將 小原正恒著

◎縮法華經並開結  
刷

◎勤行作法

◎立正安國論——橘香集は賣切れたり

洋裝二千頁定價金四圓なるも特價金參圓と郵稅十六錢を以て提供す  
定價金廿五錢 郵稅金四錢

壽量品の大意を知らざれば一代佛の中心を知らざるもの也佛教の活力眞價は壽量品にあり讀め大に讀み佛陀の眞精神に接觸せよ  
上下二卷 郵稅共 金四十八錢

清正公の人格及宗教的信仰を知らんとするものは先づ本書を讀まざる可らず施本用に尤も適せり  
本書の發賣は本月限り  
有判半截携帶に尤も便なり紙製は賣切れ  
布製天金四十五錢稅六錢

信仰者が朝夕の修行は嚴正にして謬りなきを要す本書は日蓮門下を通じて齊しく奉行すべき作法を示したる教典也  
一部金五錢 郵稅金二錢

## 自殺防止論

「國聖日蓮の人格及教訓を小學校中學校の教科書に編入するの議」

(1)

最近、前途有望の身を以て自殺を遂ぐる者が多くなつて來たが、何たる悲惨の現象であらう、嘗て十九世紀には肺病患者が時代病であると云つて、之が根本療法に力を盡したのであるけれども、全く此の肉体的病毒を絶滅せしむることが出来なく、僅かに或程度までの傳染を防止するに過ぎなかつた、二十世紀は科學の進歩に伴ひ、人々の神經を刺激して生存競争を猛烈ならしむるので、何れも此の競争に打ち勝たんとして苦悶を續げざるものはない、御互に全身心の努力を注いで居る爲めに神經衰弱に罹る者が多い、斯様に外部より

來る時代の壓迫は、人をして確かに神經衰弱症に陥らしむる、地位ある實際生活を營んで行く上には、高等なる批判智識を要するので、教育上の詰め込み主義に中てられて、青年は益々腦神經衰弱症に罹らざるを得ない結果となる、加之危険なる文字と不熟なる斷片哲學の思想が顯はれて、深く彼等の頭腦を惑亂するものがあるから、多くは之れに誘惑せられて懷疑の念を高め、人生問題に行き詰りを生じて來る、既に人生問題に行き詰りを生じたる上は、その結果として人生生存の意義を無視し、生活の本義を抛つて自暴自棄にな

販賣所 東京小石川山前町七十番地 三上義徹  
〔番〇四八八二東京替振〕



るの免れない順序である、茲に或者は放縱的生活に囚はれて墮落の淵に沈むものもあり、夫れも無意味であると思ふ時は自殺に越ぐ様になる、即ち現實生活を厭ふ觀念が強くなつて、恐るべき悲劇を演ずる事になる、自殺は罪惡であると言ふ事は論ずるまでもない、此の罪惡を高等なる智識を有する青年が敢て之れを犯すのは、單に其人の身の上及び一家庭の問題ではない一國の風教に關する重大なる問題である、現代青年が斯かる不健全なる思想状態にあるとすれば、國家の前途は甚だ憂慮に堪へざる次第ではないか、試みに最近現はれたる青年の自殺を観るに、第一高等學校の學生が試験成績の思はしからざるより、遂に悲觀を懷き世を憐んで谷中天王寺墓地内に小刀を以て自殺を遂げたり、また東京府立第一中學校卒業生が東京府下御嶽神社内に、短刀を以てわれとわが咽喉を切斷し最後を遂げたるか如きは、或文藝の毒手に罹れると云ふ報道もある、また高等師範附屬中學生が鐵

道標死を遂げたるが如き、帝國大學醫科大學生が學業成績を心痛するの餘り、悲觀を懷いて鐵道標死を遂げたるが如き、何れも悲觀厭世の觀念に魅せられ前後の判斷を缺いて無慘なる最後を遂げたるの現象は此の青年に止まるにあらずして、我國大多數の青年の精神状態を實證するものではなからうか、現代の青年が誤つてかゝる思想病に冒されて居るとするならば、自殺者及び其一家の不幸なるのみでなく、一國の實力に大影響を與ふるものであると信ずる、自殺が時代の壓迫より來る一悲劇であるとは云ひ、社會政策上見逃すべからざる現象である以上は、力を極めて之が防止の方法を講ぜねばならぬ、自殺者の現はるゝや、文部省田所普通學務局長は意見を發表して云はく、

「學生の自殺に就いては、此際學校當局者が何等かの方策を立て、是を未發に防ぐ手段に出づべきは勿論ながら、少くとも最近の自殺者に就て考へて見る

と、家庭の注意を等閑に附してならないと云ふことが能くわかる、去月下旬、自刃せる一高第三部の原家壽は、家貧にして學資に窮乏し父の境遇を氣遣ひての結果だと云ふ、又數日前轢死せる醫科大學の藤倉倉之助、及び兩三日前同様の死を遂げた高師附屬中學の宮澤信義と云ふ少年は、共に學業成績の面白からざるを憂悶した爲だと聞く、斯くの如きは若し其父兄たる者が家庭に於ての注意が常に學力獎勵一點張りてなく、人格養成を主眼として心膽を練るに今少しく注意を拂はれてゐたらばと思はれる、加之自殺は一種の感染力を持つて居る、本月上旬大嶽山で喉を刺して自殺したる石黒九六の如きは、昨年其親友奥村某の厭世自殺以來、深く其行爲を感じてゐたが其後漸く考へ直すだけの餘裕が出来て、二高三部の選抜試験に應ず可く旅行の途次、自分の先輩なる前記原家壽の最期を知るや、折角の反省が

又俄かに動搖して其死を決したとも見られる、此點よりすれば、新聞記事の如きも感化影響の上に少からぬ力を有つてゐる事故、成る可く其等の事實を以て薄志弱行とし、極力訓戒的の意味を以つて掲載されたい、某紙の如く憂悶して死を計りしことを見事なる最後となし、寧ろ自殺獎勵の筆法を用ひたる如きは容易ならざる影響を與へるのである、又青年學生が成績を氣遣ふといふことに就ては、素より現在各種學校の試験制度が宜しくない、一體中學校に在つて平生成績良好の者は大學に進ましむべき候補者として推すべきものであるが、それも單に試験による學力のみを標準として、人物の高下と云ふ點に就き探點する方法を缺いて居るから思はしく行かないのである、素より試験制度は早急に改め得られる者でも無いが、早晚人物養成を主眼としての改良を試みねばならない、同時に一方では家庭に於て貧の苦とか入學進級等の遅速優劣等を餘り論じなくなれば、相俟つて學生の氣品を高尙にす



ることが出来るであらう、其結果は自殺者は少なくなる譯である、然うなれば學生も假りに一二回の試験は失敗したところで、一年間だけ人物の養成が出来ると云ふ所謂深遠な理想に向つて進み得るのである、然るに今日の如き有様では到底それは望まれない、現に自分の長男の如きは一中の一年生であるが、自分が斯ういふ主義なるにも拘らず入學以來毎夜十二時まで學力試験の爲め勉強して居る、其結果人間を大きくしやうとする爲の人物養成の道が講ぜられなくなりはいないかと憂慮して居る、況んや親達から早く入學しろ進級しろ優等になれと、學力一點張りの競争を勧められるに至つては、此弊害は尙更で、年少氣銳の者は四圍の事情に迫られると知らず識らず死ぬ氣にもなるのである、要するに目下の最大急務としては、家庭に在る人が充分に意を用ひて學生の氣を大ならしめるに努め、假初にも自殺の如き狂態を學ばしめないやうに心すべきである。』更に一木文部大臣の意見として新聞紙の報ずる所は

當局者の意見は一應の理あるを信ず、然れども一般家庭に於て人格養成を主眼として教育的の實績を擧ぐる力があるであらうか、家庭の實際に於て、其子弟を教育すべき教育的智識を有するものが果してあるであらうか、家庭の長者が訓戒的に薄志弱行の氣風を却ぞくだけ人格の權威を有するものがあるであらうか、吾等の觀る所を以てすれば、今の家庭の内幕は、子弟の訓洵處でなく其長者自身が瞬間的物欲生活に囚はれて名利の奴となつて居るものが多くはないか、口には人格主義を唱へて高潔なる品性を養ふべしと力説して居る思想家の家庭でさへも、惡風潮に感染したる其亂脈さには呆るゝ程のものが多いためであるから、他の經濟的實社會に立働くものゝ家庭に對して、子弟の精神教育を囑するも良き成績は望まれない様に思ふ、亦現在の學校に於て、人格養成を主として氣分を高尙にせしむる様になつて居るや否や、教育の本義が深遠なる理想に向つて突進せしむる意味合になつて居るであらうかどうか、我國の教育精神は、崇高なる人格を訓練す

「近時青年の氣風一般に頹廢し、年少學生にして自殺を圖る者あり、之を各個人の内面的事情より察すれば氣の毒の感なきにあらざれども、亦國家の一大不祥事と云はざる可らず、世界は正に大動亂の裡に有る今日、斯る不祥事を見るは國家の爲め眞に憂慮に堪へず、之が原因に關しては種々あるべけれど、特に讀書より受くる惡影響の甚大なるべきものありと信ず、文藝上の價値は暫く措き、不健全なる出版物が世道人心に及ぼす惡感化特に年少未熟の青少年を害ひ、思想を癡弱せしめ人生觀を動搖せしめつゝあるの事實は甚だ明瞭にして、直接之が教育に従事する教育家は勿論、社會教育上大なる注意を要す、斯る氣風を一掃し、斯の如き脆弱なる思想の轉向を圖り、以て剛健不拔なる思想を鍛鍊せしむるは、實に現下の最大緊要事ならずんばあらず。』

にあるを信ずるも、其任に當る教育者の人格は完きものであらうか、教育者の人格は先決すべき重大問題である、之に對する東京府立川田第一中學校長の説として新聞紙の報ずる所によれば、

「併し是れは現代教育の缺陷ではなからうか、文部の檢定さへ及第すれば、馬の骨でも教師たり得る今日は智育にのみ趨り過ぎてゐる、今少し社會及當局は修身方面をも考へて欲しい、教師の人格及び修養と云ふ事は大問題である、

吾人は川田校長と意見を同ふするものである、而して又一木文相の不健全なる出版物が人生觀を動搖せしむるが故に、之が取締りを嚴重にする事は、惡風潮を防ぐ適切の方法である事は、何人も同意を表する事であるが、其所謂人生觀を動搖せしむると云ふ人生觀の内容はどうであらうか、此の内容を明確に表示する事がないならば、あらゆる防止の方法を講じても人生の行詰りに於て、懷疑煩悶を超越する事は出来ない、如



何に剛健不拔なる精神を鍛錬せよと叫んでも人生觀の根本義を徹底する事が出来なければ、人間として生存する意義が明瞭にならないから、愈々進めば進む程人生の歸趣に迷ふことになる、現代の青年が薄志弱行にして厭世思想に驅られて居るのであるから、先づ一國風教の指針を明かにして人生觀の歸向を示さなければ、何時まで経つても懷疑煩悶に悩むものを絶滅することは出来ない、茲に於てか、青年及び國民の全般に向つて剛健不拔なる精神を訓練するには哲學を基礎としたる宗教的的人生觀を徹底せしむるにあり、人生觀は五十年の生涯を渡り行くと云ふ事ではない、人間の人間たる價值及び生存の意義を明かにするのであつて、現在の我は亡ぶるが如く觀ゆるも亡ぶるものでなく、我の實在生命は現在及將來に大發展を爲すべき原則の上に、

人間として人間の天分を遂行せんがために生存の必要があるので、大理想實現のための生活其ものである、されば理想なく意味なくして人間の生存を營むことは出来ない、故に吾等の正しき努力は大宇宙の理想實現に向つて貢献するのであると謂はねばならぬ、さうして人間の努力せし正しき事實は、萬代に朽ちざる生命と權威とを有す、かゝる微妙なる意義を徹底せしむれば、單なる現在主義や無靈魂主義に囚はるゝ様な事はない、目前の成功如何を目當として世に處するから、そこで現代に於て如何に努力しても駄目であると云ふ様な絶望に陥るのであるが、崇高なる大理想の爲めに、人間として努力すると云ふ事を考へ來たれば、自分の成せし仕事は假し失敗に終らうとも、誠意以つて奮闘せし事實は生きて働いて居るのである、必ずそこに靈妙の力相通して之を持続するものがあるから、將來には成功の結果を得

る事が出来る、彼の孔子孟子の如き聖賢の土であつても、一代に於ては大失敗を以て終つたのである、即ち現世には絶望であつたけれども、後世には其思想及び事業は益々發展せられて、現代の思想界を支配するの權威を持つて居るではないか、されば現在の纖弱なる我の中に、大なる力ある我ある事を自覺する事が人生觀の徹底である、斯くの如く私の存在を自覺するに至れば、必ず國民的自覺に進み來る事が出来る、我等は宇宙の一員であると同時に國家の一員である、我々の肉身は勝手に左右し得るが如く思はるゝが、人間としての我は生るゝと同時に、一國の恩惠的保障を享けて始めて生活を營む事が出来る事になるのである、肉體の我は國の制度規律に支配せらるゝのが眞理である、絶對に自由ではない、故に自ら求めて死を早めると云ふ事

は、團體の一員としては謬まれる態度である、かゝる意義を理解し國民的自覺に到達するならば自己と國力との關係を明察し得る餘裕があるので、逆上せる狂態を演ずる様な事は無くなる、斯くて剛健なる氣象をも自然に養ふ事が出来ると思ふけれども、かゝる風潮は、單に一部の社會改善の志士が絶叫するとも、國民の大多數にこの意義を徹底せしむるのでなければ、此の時代の惡風潮を撤回刷新する事は至難である、故に人生觀を徹底し國民的自覺を與ふるには、小學校時代に兒童の内部生活に向つて、極めて通俗的にかゝる權威ある力を注入せねばならぬ、而らば其普及實行の方法如何、我が國民性を發揮したる偉大なる人格者の教訓的歴史を、小學及び中學の教科書に詳細に掲ぐる事を要す、かくて其偉大なる人格の靈力が、兒童の向上的精神を調化啓發し、



自然の間に人生生活の意義を理解せしむるに至らば、如何に激甚なる壓迫競争の中に處するも、百折不撓、職分の爲に倒るゝの氣象を養ひ得ると信ずる、斯くの如く献身的精神の力は、疑なく煩悶苦惱を超越し、極めて剛健なる氣象を以て活躍する事が出来る、然らば、小學校の教科書の上に掲ぐべき歴史上の偉大なる人格者は何人であらうか、太閤秀吉や徳川家康や、其他歴史上に現はれたる所謂英雄豪傑は、凡俗を抜いて居る事は確かであるけれども、未だ人心の機微に觸れて人格の訓練を興ふる權威を有つて居らない、また弘法や親鸞の如き厭世悲觀の思想をなされたる人格は、文明の時代に於ては何等の用に徹底せる人生觀を論道して國民的自覺を興ふるが爲め、献身的な大運動を敢てせられたる日蓮上人に於て、現代の人心を啓導し、鍛鍊せしむるの絶對權威ある事を信ずる、

世の教育者輩が、日蓮は宗教上の改革者にして法華宗の祖師であるのみ云ふて居るが如きは、全く日本歴史の上に活力を興へられたる日蓮上人を窺ふの智慮がないからである、如何にも日蓮は宗教上の改革者に相違はない、其宗教的改革の爲め一身を屠して戦はれたのは、何の爲であらうか、即ち多くの宗教が厭世悲觀の思想を鼓吹して人間の生活を否定するが如き態度であるから、之に向つて痛撃三十棒を加へ、法華經の生命を基本として徹底的な人生觀を明かにせられたのである、夫と同時に國民の大多數が勤王愛國の民族的精神を失ひ、現在の國家を呪ふが如き亡國的思想の強かつた事を看破せられ、尤も猛烈に國家に對する國民的自覺を促したのである、即ち國運發展の爲の決死的運動である事は明かである、然かも其論ずる處極めて包容的にして雄大である、然かも日本國家の天分天業に對つて、宗教的に國民的に之れが實現に最大の努力を致したのである、日蓮上人の告白には「國の爲め神の爲め一切衆生の爲め之を申すなり」と云ひ、また「大忠

を懐いて」と謂ひ、其立脚を明かにして「日蓮は何れの宗の元祖にもあらず末葉にもあらず」と謂ひ、眞に人心の根底に大信念の力を興へて、理想に活ける人間の活動を促がさんが爲の一代の歴史である、その活歴史は今現に我等の眼前にあつて我等の精神を鼓舞作興しつゝあるのである、故に此の偉大なる人格者の活動的歴史を小學及び中學の教科書として、教育的有力なる材料として採用すると云ふ事は、日本人らしき日本人を養成する所以である、我々は世の先覺者が公平なる識見を以てかゝる偉大なる人格に接觸し感孚して、各人先天の向上性を活現する事に努めなければならぬと思ふ、日蓮は日本人である、然も我々の祖先である、此の祖先である日本人が圓滿にして偉大なる人格である事が明瞭であるに拘はらず凡人が漫りに小理窟を構へて敢て之を用ひざるの愚を

なせば、何れの時か國民精神に人生觀の歸趣を興へ徹底せる國民的自覺に立たしめる事が出来やうぞ、今にして此の大自覺を興ふるの方法を講ぜずんば、物質文明の激甚なる壓迫の爲に、益々生活の煩悶に苦しみ人生の進行に行き詰りを生ずる、將來甚だ憂ふべき結果あるを見る、吾等は熱誠以て之を高唱す、先づ今の日本の青年をして活ける日蓮魂に接せしめよ、一切の問題は即座に解決するを得べし、日蓮魂は勇猛精進の力である、いかに苦痛迫害重ね來たるとも之を轉化せしめて事業成功の上に力となる、日蓮魂の中には人生觀もあれば國民的自覺もあり今の識者が叫んで居る人格の修養剛健の氣象も皆悉く包蔵されて居る、かるが故に日蓮魂の靈水を注がば、神經衰弱症の如きは根本より絶滅すべき事を信ずる、國民をして健全なる精神状態に進ましむるには、先づ萬事を抛つて日蓮上人の人格に感孚せしめよ、(統一閣日曜講演大意)



# 時代の要求と日蓮主義

大僧正 本 多 日 生

日蓮主義は、純宗教的の清度と理想的文明の建設と云ふ二方面に就て、無論偏廢すべきものではないが、日蓮主義の當面の目的は、理想的文明を建設するにあると信ずる、それ故に日本の文明を完成して行く上に於て、更に進んで云へば世界の文明を完成して行く上に於て、日蓮主義者は大活躍をしなければならん時期に際會して居るのである、少なくとも日蓮主義者である以上はこの自覺を持たなければならんのであります、大體時代と云ふ事に就て申したいのは、或人は時代など云ふのはいけないと論じて居るものもあるが、日蓮主義は時代を最も重く観て進む所の宗教であります、それは大上人が宗教五綱の中にも時と云ふ事を論ぜら

れて居り、さうして其時と云ふ事は末法の時と云ふ位でなくして、非常な敏活な意味に於て時と云ふ事を論じてあります、それが爲に「撰時抄」と云ふ御書が出て居る、「時を知るを以て大法師となす」如何に教養が能く分つても、信仰の簡條が分つても、時代を了解しないものは大法師となり得ることは出来ない。唯だ昔の學問をするばかりで、時代の事を顧みないで宜いと云ふ金挺頭腦は完き日蓮主義者と云へぬ、開目抄の最結文も時と云ふ事を以て結んである、釋尊が人類の上に御降誕なされたること、羅什三藏が態々天竺から支那に來られたこと、傳教が支那に行つたこと、其他先聖のいろ／＼清き事蹟を擧げられて、至誠道を思ふ

ものはデツとして居れるものでない、必ずや其必要に應じて活動を起すものである、至誠思ひなしてある、故に佛法は時に留めを差さねばならんと云ふが最結文である「天臺云はく適時而已佛法は時に依るべし」いくら立派な教でも時を忘れて用をなさない、故に他の場合には斯う仰せられて居る「千經萬論を習學するとも時機相違すれば驗なし」と、千經萬論を習學しても時機を觀察しない限りに於ては何の效能もないものである、況んや千經萬論を習學せずして、金挺となれるものに於てをや、時は非常に大事であります、萬物は時と云ふ關係に於て生きて居る、涅槃經に時と云ふ事が詳しく説いて居る、我々に時を除つて仕舞つたら絶望であります、我々凡夫が佛に成るに就ても、時がなかつたら成れない、日本の建國の理想も時を除いては實現することは出来ない、悠久は物を成す所以である、天壤無窮は時である、時に於て總ての目的は達せられるのである、時は金なり真理なり、時に依つて一切が成就されて行くのである、時を侮蔑してはならぬ

と云ふのが佛教の真理であります、故に時代の要求と云ふことを深刻に觀察して行かなければならんのであります、日蓮上人の當時に遇つて考へますれば、上人ほど時代に向つて新らしき活動を起した人はないのであります、一切の事柄が時代に向つて大發展を試みられたのをります、六百數十年前の鎌倉時代は、總ての事が社會の舊慣を以て拘束せられて居る、それが舊來の宗旨を捨て、大上人の下に集まると云ふことは、餘程の進取的氣象を持つた者でなければ出来なかつたであらう、今の時代に於てマゴツク様なことは、日蓮上人の時代には側に寄ることも出来ない者であらうと云ふ、夫等の人は思ふに石を擲つ仲間に入るかも知れぬ、今日の社會は、眞に旦に夕を計られざる状態を以て活躍し進化した居るのである、その社會に對應したる活動をなさねばならん……、それで今の時代の要求は多々あります、少しく順序を立て、述べ



### ▲教育と宗教との關係

に就て、この解決を時代が

求めて居るのであります、是は大問題である、國家にあらゆる機關が備はつて居りますけれども、國民の精神を直接に感化するものは教育と宗教であります、教育宗教が國民の精神を陶冶し感化して行く直接の機關であります、是が衝突の状態であつたならば、到底國民感化の目的を達することは出来ないものである、然るに今迄の日本に於ては、教育と宗教とは全然懸離れたものである、政治上に於ても宗教の價値を認めなかつたのである、國民は教育のみを以て作り得ると云ふ様に、教育萬能主義を以て今日まで進み來つたのである、所が此の數十年間の結果に於て考察すると、國民の精神界よりしてあらゆる缺陷が生じて來て、どうしても教育のみにては完全の國民を作ることが出来ない、と云ふ結論に到達したのであります、所が其缺陷は何を以て救済するかと云ふことを段々調査しました結果種々教育上に改善すべきこともあるが、第一は宗教の

宗教を學校へ入れることは出来ないが、宗教心は學校に於て輕蔑すべきものでないと云ふことを承認された意味に出て居ります、其承認されたのは元からさう云ふ意味だと云ふことに云ふてあるけれども、却々元からさう云ふ意味に行つては居りません、兎に角教育と宗教の關係は我國に於ける刻下の大問題である、是は未だ端緒てありますが、段々この問題が進んで參りまして、愈々教育と宗教と接近すべきものだと云ふことになつて來たら、誰れが出て之を解決するものであるか、教育の方から要求される宗教は國民道德歴史的文明に順應したる宗教でなければならぬ、其教育上適當なる宗教の選擇に移りましたならば日蓮主義以外には第一の希望に添ふものはないのである、日蓮主義の獨占てあります、教育上からして適當なる宗教を選擇し、云ふ着想が現はれて來たら、此の日蓮主義に依らざるを得ないのである、茲に於てか、日蓮主義の前途は頗る有望であり、隨つて日蓮主義者の責任も重いのである、又他面には陸海軍軍人の精神教育に於ても、是と

信念を尊重することが教育上に缺けて居つたのが、最も大なる原因であると云ふことの自覺を起して參つたのであります、それはいろ／＼の方面からこの運動が起つて居ります、直接の活動を起して居るのが歸一協會であります、是はあらゆる團體に卒先して早くより此の問題の調査研究に従事し、遂に一の決議を見るに至りまして、數ヶ月前に其決議を當局大臣其他各府縣の教育會に向つて其意見を發表したのであります、又其決議理由書を樞密顧問官各大臣兩院議員教育調査會等に向つて發送せられました、それは現時我國の青年の思想が頹廢するのは、宗教心信念缺乏を原因と認むる故、國家將來の爲に慨嘆すべきことであると云ふ趣意を以て之を發表致すことになつたのであります、六月三十日の新聞紙には、此意見書に對する所の當局大臣の意見が發表されて居りますが、それに依れば歸一協會の主張は當然の事であると云ふ意味であります、唯だ教育と宗教を混同することは出来ない、宗教にはいろ／＼違つた形式があるものであるから、形のある

同一に此の國民道德と宗教心の必要と云ふことを自覺して居るのでありますから、其處にも同じ關係を持つてあります、延いては國民全體が國民道德と健全なる宗教信仰を兼ねるを要し、之を日蓮主義に求めざるを得んことになる、さうすると純宗教の立場としても何等其處に遜色はないので、世界の宗教に比較して最も優秀なるものであり、國民道德と能く調和し、或意味に於ては國民道德の指導者であり先覺者である、故に教育と宗教との關係を解決するに就て、此日蓮主義が働かねばならぬ、日蓮主義は真に前途有望であります。

### ▲國民思想の統一

と云ふことに就ても、時代の要求

求が起つて居るのであります、是は我國に歴史的に發達したる思想と歐米外來の思想と衝突し、西洋の倫理宗教或は文藝文學から驚らして來る種々な思潮、其處には頗る劣悪なる思想も起つて參る。又經濟關係からして起つて來る社會主義的思想勞働問題、種々なる危



險思想迄を含んで来て居るのであります、此の危険思想は、日蓮主義者の本分として率先して撲滅に努力すべきである、日蓮上人の忠君愛國の思想から考へて、撲滅の任に當るのが日蓮主義者の天分である、この國民思想の統一は誰が行るか、政治家が行るか宗教家が行るか云ふことになる、此の思想界の開顯統一を擔任する者は日蓮主義者の外は無いと信する、單に國民道德の點から云へば優秀の點がありましても、他の點に缺くる所があります、今日までは國家主義を取れば人道主義を忘れ、團體主義を取れば人格主義を忘れたやうな國民道德を、政治家なり教育家なりが考へて居つたのである、宗教家の方はどうであるかと云ふと、矢張り佛教徒は多く佛敎に囚はれて仕舞つて居る般若心經とか維摩經であると阿彌陀經であると云ふものを以ては、逆も現代の思想を統一する力はありません、いくら阿彌陀經を裏表引繰り返して讀んでも之を以て國民思想を統一する力のあるべきものではないのであります、佛敎中に現はれたる雑多の思想の一

點を代表するのであるから現在の如くあらゆる思想が進化して參つて、多くの思想が混亂して居る現代には蹴落され可きものと思ふ、即ち古き思想として見るべきである、決して新舊思想を統一する權威を持つべきものではない、儒敎にしても足らん處がある、西洋の倫理に委かせることも出来ません、日本の神ながらの道だけでも足りません、神ながらの道に善い所は多々ありますけれども、總ての思想を統一するには古事記と日本書記とを以て餘りに素朴に失して居ります、平田篤胤でも二宮金次郎でも足りません、然るに此の日蓮主義の思想を以て來ると、あらゆる方面が頗る能く綜合されて、其處に立派な統一點が示されるのである、日蓮主義は今日の思想界に提供して、始めて其眞價を發揮し得る大主義であります、此意味即ち現代の思想界の紛亂を調整し統一すると云ふ上に於て日蓮主義を要求して居るのである、日蓮主義は古い思想ではありませんが、日蓮主義は今日の新しい思想と古い思想を能く調和して居る所の全一の主義であります

假りに團體主義人格主義と云ふやうなことも直ぐ分る、團體の爲に盡す所の思想は、日蓮上人の立正安國の精神、「先づ國家を祈つて須らく佛法を立つべし」と云ふのは團體主義の道德、それから「日蓮は日本の柱」とあると云はれた、大體名の書き方でも分つて居る、上人位自分の名前を大きく書いて居る人はない、又あの位自分の名前を名乗る人はない、「日蓮が」「日蓮が」と云はれた、それが大きな聲である、文章を見ても「日蓮が」とあるのが赤裸々の日蓮、單なる日蓮と云ふ大きなものである、「日蓮は日本國の柱なり」「日蓮を倒すは日本國の柱を倒すものなり」と云ふ位に大きい、閻魔法王の前に行つても日蓮が弟子檀那と名乗れば、閻魔法王が冠を除つて頭を下げると云ふ位に大きい日蓮である、であるから人格主義の方も調ふて居る、何う云ふ思想を統一するにも、日蓮主義は全きものであります。

## ▲我國文明の體系的發揮

是が今日

非常に必要なことであります、我國建國以來約三千年の間に、我が祖先が建設致しましたる日本の文明、其の或一部を取つて他を捨て、居るのは愚な道り方である、之は體系的に發揮しなければなりません、頭は頭、手は手、足は足と全體を認めて發揮しなければならぬ、武士道の發揮であるとか、佛敎の發揮であるとか、神ながらの發揮であるとか云ふ言葉だけでは足りない、體系的の發揮を理想して居るのが日蓮主義である、即ち神ながらの道に就ては、建國の大理想、御皇室の尊嚴、民族的精神、護國の神明と云ふ四箇條は日本國民として捨てられぬものである、所が日蓮上人は惟神道の先覺者である、國民的精神の模範者として又護國の神明を適當に敬はれたのであるが、却つて神道家が日本の神様を宗教の神と思ふから間違ひが起る之に反して耶蘇教などは日本の神様を國の神なるが故に敬ふてはならぬと思ふて居る、何方もいけない、眞正な意義に於て日本の神様を敬ふことを知つて居るものは日蓮主義者である、他は過ぎたると及ばざるもの



とてある、總ての事に於て日蓮主義は先覺者である、又儒教に就て考へても、儒教の倫理の主なるものは、先づ至誠とか天道明德と云ふやうなことを説いて、倫理の根底を立てたこととあります、倫理は働きの上に於ては變るけれども、根柢は變らない人間の明德を根柢として萬世不磨と天道と結んで顯はれて居る所のものであります、今の西洋の倫理學者の様に、倫理の總てが變ると思ふのは間違である、儒教は體道用道を説き、體道は萬世不磨であり、用道は時處位に依つて變つて行く所のものである、聖人は變通を知らなければならん、時と共に移るのである、金挺頭腦は儒教でも嫌ひなんてあります、斯の如く體道用道を立てた所の倫理の型は非常に貴とい、又倫理を調節して居ります儒教には「大學」の始めに、身を修め家を齊へて而して天下國家を治むると云ふ修身齊家治國平天下を一貫して説くのである、即ち大徳は教化し小徳は川流すと云ふことを説きまして、實に立派に倫理を調節することを教へてある、敢て西洋の倫理のやうに、直ぐに個

人主義だとか博愛主義だとか、世界主義だとか帝國主義とか云はない、西洋人の頭は三角に出来て居る、東洋人の頭は圓く出来て居る、西洋人には圓とか妙とか云ふやうなことは分り難い、西洋人には圓とか妙とか云ふことは分り難い、儒教の貴とい所は倫理の調節に在るのである、それから徳目の整頓である、さう云ふ様なことは日蓮上人に於ては何うかと云ふと、上人は頗る儒教を愛讀した人である、自筆の「貞觀政要」が富士の本門寺に残つて居る、徳川時代に至るまで此の書物は儒教のあらゆる知識を代表する所のものであつた、それを日蓮上人は愛讀せられました、この中には政治でも經濟でも皆論じてある、日蓮上人の御文章には儒教のことが澤山擧げてある、上人の意中の人は唯だ釋迦牟尼如來ばかりでない、殷の忠臣比干だとか呉の忠臣伍子胥だとか、又唐の時代の魏徵だとか忠臣公だとか或は伯夷叔齊であるとか大公望張良であるとか云ふ人は、皆日蓮上人の崇拜された人物であります、唯だ普通の僧侶は、大公望張良は關係がないと思ひ、或は比

干であるとか伍子胥であるとかは縁がない矢張り天台妙樂傳教と云ふ様に考へて居る、是は片寄つたる三角の眞似をして居るのである、日蓮上人は大公望張良でも、釋尊の使として出られたものであると云ふ位に尊敬致して居る、女釋迦佛供養抄に依れば、總べて文明の建設に努力し貢献して、其功勳のある人は本佛釋尊の現はれてであると云ふことを説明してある位であります、季札が心の約束を違へずと云ふことは名處に引いてある、獨り腹の中で誓つたことをも違へないと云ふ季札の人格を敬慕せられたのである之は皆上人の儒教的な點である、儒教にもあるけれどもさう云ふ思想が儒教から來て居る、佛敎の方のことは申すまでもない、佛敎全體を日蓮上人が代表されて居るのである而して日本の文明は神儒佛の三教を以て、是が調和して發達したのであります、此の系統を代表したる者は聖徳太子を受けて菅原道實卿、北畠親房卿それから一條兼良卿、水戸の光圀卿と云ふやうな人が、皆此の三教調和を代表して進んで居る、神儒佛三教が調和的

に發達したのが日本文明の正統であります、平田篤胤賀茂真淵が豪いとか、吉田松蔭が豪いとか云ふので、其時代に於て勤王と云ふことに就て豪いので、それは忠君愛國の精神に於て光りを放つて居るけれども、日本文明の正統の發揮と云ふことになつて來ると、日蓮上人の偉大な思想が分つて來る、今は日本文明の體系の發揮を要するの時に到達したのであります、大正四年の今日は最早や神道流てもいかず、儒教流てもいかに、明治維新當時の頭腦では足らぬ、どうしても日本文明は、日蓮上人の様な調和的なる精神を迎へなければならん様になつて、さうして各方面よりこの要求が起つて居る、それにも拘はらず、日蓮主義者がこの偉大なる要求を忘れて行くこととは残念千萬の事である、今や時代は刻一刻と日蓮主義の勃興を要求して居るのであるから、さう云ふ大目的に向つて邁進することが大切である、日蓮主義者は着想を大局に措いて、時代の新要求に對應し、日本文明の全體を體系的に發揮することに奮闘努力せなければならぬと信じます。



# 民族性の修養と日蓮主義

子爵 五島 盛光

私は暫く田舎住いをして居りましたが、此の度少しく用事があつて久方振りて出京致しました、私の舊藩と云ふのは皆様も御承知か知れませぬが、九州の西端長崎灣を距る五十五海里の島である、茲に島籠りをして朝に岩打つ浪を眺め、夕に空行く雲を望み、或は深更月影を仰ぎなどして居ると、折に觸れては六百餘年の昔の佐渡の孤島に於ける高祖日蓮上人の面影を想ひ起す事が多いのであります、上人は尊い法の爲めに時の執權たる北條氏と争つて其の忌諱に觸れ、遂に佐渡に幽囚の身となつたのであるが、私の島住ひはさう云ふ立派な動機からではなく、さる出来事の爲に島に滞在すべく餘儀なくされたのであつて、上人とは月籠

の差である、上人の佐渡に居られた時には、御弟子としてには幾に日興上人一人が御附申して居つたばかりであらゆる艱難辛苦を堪へ忍ばれた、私のはそれと違ひ島に於ても別に迫害や壓迫を被つて居る譯ではない。併し此の大正の御代に人は皆都會に出て活動して居るのに、未だそれ程の老年でもなくして獨り島に歸つて居ては自ら種々なる感想が湧出て、幾度か其の昔の佐渡の上人を偲ぶのであります。

此島は天草島原に近い關係よりして、一度切支丹禁制せらるゝや、其の信徒は一時に此島へ落込んで刑罰を免れんとした、其結果昔は天草が切支丹の本家本元であつたが、今日は島原の方には少なく、目下長崎縣

下中、最も切支丹の多いのが大村であつて、第二を長崎市とし、第三は實に私の島であると云ふ有様である、彼等は宗門こそ切支丹であるが中々勤勉家で、却つて我々の在來の土地の者よりも宜く働きます。殊に此の島に於て最早二十有餘年の久しい間傳道に従事して居る一人の佛蘭西の宣教師がある、此の人は明治八年に初めて日本に來朝し、最初新潟にて布教しそれより各所を経て此の島に渡來し、今日は七十餘の老人であるが島の人となつてより既に二十餘年間、始終偷らず基督教の傳道に努めて居る爲め、信者の數を増すと共に在來の信徒の信仰も大に堅固になつた、宗教上から言へば切支丹は邪教徒であるが、日々の生活上に於ては普通人の及ばない程宜く勤勉する、それに引返へて基督教以外の人即ち島の一般の人々は離島であつて文化の及ばない爲か、生活程度の低い故か暮しの樂な爲か一體に怠けていけない、又それと同時に宗教心も薄いやうである、尤も中流以下の者にして基督教徒以外に本派本願寺の信徒で中々信心の堅い人達があ

る、即ち基督教徒と眞宗信徒との二つが相對して居て是等の二宗門の人は中々信仰が堅固である、然るに中流以上の人達になると何れも宗教心が薄いのである、それからして此の日蓮宗と云ふものはどう云ふ間違てあつたか、恰度切支丹が禁制になると同時に切支丹と一緒にして日蓮宗を非常に排斥して誰も信仰する者がない有様であつた、處が今より十年程前に八品派の布教師が、初は道場を使用し非常に熱心に布教の結果、昨今は一二の寺院も出来るやうになつた、一方の一般世間に於ても近時漸く日蓮主義の妙味を會得し、之を崇拜することが大分盛になつて來た一大傾向に隨伴して、島に於ても遅々信者が増加し、又各自の信仰心も頗る堅固になつた、現に昨年私が歸つた所自分は宗教家ではないが、聊か日蓮主義に就いて研究して居るからと云ふので講話を迫られ、目下一ヶ月に一二三回集會を開いて御互に御妙判或は上人の人と爲りなどに就て清き話を交はすことになつて居る、斯くの如くにして一天四海皆歸妙法と云ふ上人の大理想は次第に實



現せらるべく、日本の西の端なる離れ島にも纏て美し  
 蓮華の花は綻びませう。

抑も我國の憲法に於て宗教の自由が保障されて居る  
 併し乍ら、凡て宗教は國體上に於ても、風教  
 上に於ても善良なる結果を齎すものでな  
 ければならぬ、それに付ては法華經主義を  
 除いては斯る宗教のないことを私は斷言  
 するである、法華經主義は我が國體と誠に  
 良く合致するのみならず、今後對外國との  
 競争場裡に於ても、此の法華經主義を大に  
 發揮して行く必要がある、又此の法華經主  
 義に依るにあらずんば決して我國の前途  
 に光榮を認むることは出來ないと確信致  
 します、故に私は今學校の方に關係して育英事業に  
 従ひ青年の訓誡をして居るが、又一面に於ては宗教心  
 の養成の必要なるを痛切に感じ、甚だ微力乍ら一身を

を報ゆるであらう、又露西亞が勝たならば露西亞は三  
 十七八年戦役の敗戦を膽に銘じて居るから何事か金つ  
 るに違ない、茲に於てか屢々日露同盟論或は日獨同盟  
 論の提稱せらるゝを聞くのである、私の考へては露西  
 亞と同盟が出來れば甚だ結構であると思ふ、それが出  
 來ないならば何時か一度は再び日露戦争を繰返さなけ  
 ればならぬから、我が國民も銘々今日より豫め覺悟し  
 て置く所がなければならぬ、私は此程我が陸軍部内に  
 於て有力なる某陸軍少將が昨年歐洲各地を視察して來  
 た報告書を見ましたが、それに依れば露西亞に於ては  
 三十七八年戦役に於て何故日本が勝つたか、何故露西  
 亞が負けたか、其原因に就いて最も細密精緻なる研究  
 調査を遂げた結果、日本の勝つたのは軍器の優秀なる  
 爲てはない軍費の豊富な爲てはない、唯忠君愛國、一  
 死國に奉ずる熱烈なる國民性の發揮に基くことを發見  
 して大に喜び、茲に一大革正の必要なるを感じ、教育  
 の上に於ても宗教の上に於ても政治の上に於ても、其  
 他總ての方面に向つて根本的改良を施し露西亞人と云

獻げて廣宣流布に努めたいと思つて居ます、願つて今  
 日は如何なる世の中であるかと云ふに、御承知の通り  
 昨年より、大戦争繼續して歐羅巴は麻の如く亂れ、我  
 國に於ても先頃青島に兵を出した、青島は忽ち陥落し  
 我國は大勝利を得て東洋の風雲は收まつたが、歐羅巴  
 は未だ中々大騒ぎをやつて居る、餘り戦争が永びく爲め  
 昨今世人は夫程氣に留めないが、最近の歐洲電報に依  
 ると一時大分弱はつたと傳へられた獨逸は中々優勢で  
 あつて、遂に露西亞のワルソウを陥れて、大打撃を被  
 らしめたと云ふ、此の様子で行つたら仕舞はどうなる  
 ことやら見當が付かない、私の考へては露西亞の方で  
 はワルソウを捨て、北方に退き、冬籠りをして其の昔  
 ナポレオン戦争の時モスコウを焼いて佛軍に大打撃を  
 加へた軍略に倣ひ、深入りをして攻寄せて來る獨軍を  
 潰滅させる謀てはないかと思ふ、併し獨逸が其の手  
 に乗るかどうかは元より疑問である、果して獨逸が勝  
 つか露西亞が負けるか、今から豫測するのは困難であ  
 るが、若し獨逸が勝てば獨逸は日本に對して青島の恨

ふものは露西亞人たるの性格即ち強固なる露西亞人の  
 國民性を形造らなければならぬとして非常に努力して居  
 ると云ふことである、次に獨逸は如何、獨逸帝國のカ  
 イゼルは今より百年計り前迄は、獨逸聯邦中の小さな  
 一國プロシヤの皇帝に過ぎなかつたが、普佛戦争後大  
 に勢力を得て獨逸全體の皇帝となつたのである、斯の  
 如く歴史は短かきに拘はらず、今日歐羅巴數國の聯合  
 軍に對抗して運れを取らないのみならず、或る場合に  
 於ては獨逸の方が頗る優勢であると云ふのは、獨逸が  
 多年國民性の教養に就いて努力した結果が今度の戰  
 争に於て立派に實現されて居るに外ならぬこと、信ず  
 る獨逸は戦争に強いばかりでなく貿易上に於ても動も  
 すれば英吉利を凌がんとして居るのである、それはか  
 りてなく、教育上に於ても宗教上に於ても獨逸は非常  
 に注意を拂つて居る一體基督教の舊教は佛蘭西に於て  
 は頗る盛であつて、つい先頃迄は國教として定めてあ  
 つた程である、さうして教育上に於ても僧侶が子弟を  
 訓育すると云ふ有様で、新教を排斥したが其結果佛國



人の宗教心は大に薄くなつた、之に反して獨逸は元々新教の盛な國であるにも拘はらず、舊教の信奉を許し之に力を注いだ、斯う云ふやうなことが獨逸の強い原因ではないかと思ふ、夫から次に亞米利加はどうであるかと云ふに、亞米利加は金持の國である、殊に貿易上に於ては日本などは足許にも追付かない程である、併し残念なことには亞米利加には國民性と云ふものがない、之れに付ては彼のゴルドン將軍が慨嘆して居る言葉があるので能く分る、由來亞米利加は今日でこそ合衆國と云つて大きな國であるが、最初は英吉利の殖民地であつたのをワシントンが獨立戰爭を起して英吉利より分離させたのである、そして其の獨立當時の純粹の亞米利加人と云ふものは誠に少數であつて今日の亞米利加人の多數を占めて居るものは獨逸伊太利其他の諸國より歸化したる人々である、故に亞米利加は金を澤山持つて居ても國民性は少しもない、富の點に於ては亞米利加を他の何れの國に對しても毫も遜色がなけれども、悲しい哉亞米利加の國民性は種々區々に

なつて居る、少しも纏つた統一したものがない、國民性が一致して居らぬ、それ故他の國と戰爭する場合例へば今日の獨逸露西亞、東洋に於ては日本と云ふやうな國民性の確固たる國と干戈を交ふることあらば、財力に於ては勝つとも武力に於ては負くるに相違ないとゴルドン將軍が長大息を漏して居るのも宜なる哉である、我國で歐亞に跨る強大國と誇つた露西亞を破つた時、全世界の國々は皆驚嘆の眼を噴つた、續いて日本の強いのには國民性の然らしむる所であることを覺ると同時に、獨逸に於ても露西亞に於ても英吉利に於ても、日本の國民性とは如何なるものであるかと云ふことが第一の研究問題になつた、一體西洋人は總ての物事を徹底的に研究して飽く迄分析解剖し、満足な理由と説明とを得なければ已まぬものである、嘗て奇術師の丸一が歐羅巴へ興行に赴き、倫敦に於て毯を空中へ投げ籠にて受ける藝を演じた時、彼の國の人々は之を不思議に思ひ籠と籠とに何か巧妙な仕掛があるものと考へて、高い金を出して丸一から籠と籠を買取

り籠を解いたり籠を解剖したりしたが別に種も仕掛もなく籠も普通の籠であつたと云ふ、彼等が如何に研究心の強烈であるかは此の例に依つて知れやう、さう云ふ研究心を以て我國の國民性を研究した結果、二千有餘年の長い歴史を経て、養成された特殊の國民的性格であると云ふ事が判つた、此の國民性を以て二十七年には支那を破り、三十三年には列國軍隊の前に忠勇を示し、三十七年には露西亞を撃ち、昨年青島に捷つた日本の國民性は斯の如く世界の前に發揮されて居るところは嬉しいが、今試みに現在の我國の國民性は果してそれ程立派なものであるかどうかと自ら顧るならば、一方に於ては立派なものもあらうが、又他方に於ては大分國民性の缺乏を來して居るやうな傾向が認められはせぬかと私に憂ふる次第であります。

世には從來數次の戰役に於て世界無比の國民性を發揮して來たのであるから、今後と雖も今迄の如く歴史の上に燦然たる光輝を添ゆる事疑はしとて晏然として居る人があるかも知れないが、今の時代は昔とは餘程遠い、今日は外國から種々のものが這入つて來る世の中である、政治上、軍事上、教育上、宗教上、哲學上、常に新らしき思想智識が無暗矢鱈に輸入されて居る、我國國民性が此の外國思想の影響を被つて傷さ又はグラツキ始めるやうなことがあつてはならぬ、どうも三十七八年戰役後、十年を経過した今日に及んで少しく籠が弛んで來たやうな感がありはせぬかと思ふ

歐羅巴に於ては我國の國民性を研究して自國の國民性の向上發展に努力して居る時、其の自家本元たる我國國民性の籠が弛んで海に寒心に堪へないのである、然らば其の籠の弛んだのを堅く締め直すには何を爲すべきか、個々の國民皆我身を自覺し餘り外物の爲に自分の心を奪はれず、西洋思想の爲に囚はれないやうにしなければならぬ、それにはどうしても宗教の力に俟



つより外にない、唯今申した通り獨逸は新教の國であり乍ら舊教を容れて、それを獎勵して英國の氣運旺盛となり、佛蘭西は舊教を國教と定め新教を壓迫して信仰心薄弱となり、又露西亞は希臘教即ちニコライの天主教で以て國を建て居る、凡そ宗教心の薄い國は、決して榮へない、先づ支那を見よ、支那は自ら君子國或は中華と稱し威張つて居たが、孔孟の學もあり、道教や回教など多少あるけれども、概して言へば、宗教心は缺之して居る、之が爲め國勢萎微して振はず、革命擾亂頻廢し共和國となるかと思へば、又袁世凱の帝國になるとも云ふ、あれ程の大きな國が衰亡に瀕して居るのは全く宗教心のないのに依るのである、次に土耳其の現状を見よ、オトマン、パシヤの時には歐亞の大陸を席捲してコンスタンチノープルを落して帝國を建てた、其の頃には、半月旗の向ふ所敵なしと云ふ有様であつた、其の土耳其も漸次宗教心衰へた爲め國勢傾き、今や幾に形骸を横へて居るに過ぎぬ、歐羅巴より土耳其の追出さるゝも遠くはあるまい

と思ふ、印度に於ても亦然り、婆羅門教の隆盛であつた時代や、我が佛羅釋迦牟尼如來が現はれて佛法を開き、燦然たる精神的文明の光輝を世界に放つた時分は、印度人の宗教心は頗る強烈であつたのである、是は世界の歴史が明かに證明して居る所である、之に依て見ても宗教心の極めて必要なることか知らるゝてはいか、然るに現代人の多くは確乎たる宗教的信念を有せざるが爲め、種々なる悲觀説或は厭世思想に囚はれて煩悶懊惱して居る、殊に最近に於て前途有爲の青年にして自殺を遂げたものが數名あつた、是等は何れも宗教心の缺乏の爲め健全なる思想に陥り身を亡ぼすに至つたものである、人として此の世に生を享けた以上は壽命のなくなるまで、奮戦力闘すべき義務があるのに、或は華嚴瀧或は噴火口に志して人意的に生命を短縮するとは何事であるか、日蓮上人は日本に生れた事を非常に喜ばれて「豈我が國を思ばざらんや」と仰せられ、時に觸れ折に

觸れ此の美しい日本の國柄を讚美して居る、さうして此立派な日本をして益立派ならしむる事を常に理想とし、非常な精力主義努力主義を以て國の爲に盡されたのである、されば國の大きい上から言へば印度が第一であるが、國柄から言へば扶桑第一と云ふことが御妙判に記されてある、然るに今日の人は何故に日本に生れたことは喜ばないで自殺を企つるのか、さう云ふ人は外國思想に囚はれ外國人臭く、バタ臭くなつた人間である、假令身には日本の衣類を着け、日本の土地を踏み、日本の生活をして居ても、其の精神は外國人になつて仕舞つて居るのである、そんな人間は幾千萬人居た所でイザと云ふ場合に何の役に立つものでない、世人は我國は一等國の伍班に列して居ると云ふので餘程慢心して居るか、中々油斷の出來ぬ世界の有様である、日本で安心して居る間に獨逸でも亞米利加でも露西亞でも他の國は皆一生

懸命に勉強してドシ／＼進歩して行く、それに拘はらず詰らぬ政論や政争の爲に黒闇の恥を外に暴露し、世界各國の嘲笑を招くやうなことがかりして居るのは情ない話である、日本人はどうしても今少しく大きくならなければ駄目だ、國民の氣質の上にて非常に狭い小さい淺薄な忍耐力に乏しい缺陷を表はして居るのは大に注意すべきことである、過般の青島戰に従軍した人の話を聞くに、日本人はどうも飽きつぽくて困ると言ふ、勇氣があつて死を恐れぬのは誠に頼もしいが、塹壕の中に潜伏して戦機のを待つと云ふやうな場合に、長い間ジツと辛棒して居ることが出來ないから早く首を擡げて仕舞ふ、すると忽ち敵に狙撃される、氣短かな爲に意外な損害を受けたことが少なくなかつたと云ふ話を聞いて成程と思つた、此の世の中が進むに従つて人は益々氣短かに飽きつぽくなるやうに感ぜられる、内閣なども一年と繼續するともう厭になつて仕舞つて更迭騒ぎが起る、今度變つた所と同じやうなもので矢張り一年も経てば變動しなければなるまい、



斯ふ云ふ風に一般の人心が飽きつぽくなつたことは餘程慎重に研究しなければならぬ大問題であらうと思ふ、そんな有様では到底大事業を成就せしむることは出来ないのである、所て露西亞人の事業計畫などと云ふものは、長い年月の間倦まず撻まず少しづつ氣長にやる方法である、例へば蒙古やアフガニスタンの侵略に就いては随分長い間努力して來たものである、前の當局者が退けば後の當局者が代つて之を遂行すると云ふ遣り方であるから計畫は着々成功して行く、併し我國の當局者は非常に飽つぽく人が代はれば前の者のした仕事は、後の人の氣に入らないで放棄されると云ふ有様である、日本人は世界の一等國民であること云ふことを自覺したならば、今少し強固なる宗教心を懷いて立ち度量を大きく持ち、總ての艱難辛苦を耐へ忍ぶと云ふ性質が養成せられなければならぬと思ふ、それに就いては高祖日蓮上人の御一代を考

へ見よ、上人は御生涯の間に數へ切れぬ壓迫や迫害を受けたが、能く之を耐へ忍んで法華經の開顯に一身を捧げられた、そして上人の理想は非常に廣大である、弘法大師とか親鸞上人とか云ふやうなもの、教とは全然違ふ、特に我が國體を重じ日本を徳ある國、光ある國にしやうとして奮闘せられた、之が我が日蓮主義である、何も他の宗教を責めて折伏しやうと云ふ譯ではないが、私の考へる所に依れば、佛教の中に於ても日本の國柄に就ては少しも心配しない宗門がある、甚だしきに至つては此の世は穢土であるから西方淨土に行かなければ樂しみはない、現世は詰らないものであると教へて居るものがあるが以ての外の話だ、今の世の中に立つて活動してこそ始めて國民の義務を盡し忠君愛國の實を擧げることか出来るのである、宗教としてもさう云ふ宗教でなければ我國の國體と合致することが出来ない、天理

教のやうな唯御養錢を上げて自分の身體を勞役して犧牲にすれば、それで難行苦行になると思ふのは大間違である、奈良の高市郡の中山の婆さんの墓などは御陵と間違られる程立派である、それは天理教徒は自分の身體を勞役すれば宜いと云ふので或る石を運んだりして働き、又金を上げて仕舞はなければいけないと云ふので皆献納するからである、斯う云ふことは經營者に取つては仕合であるかも知れないが、國民の義務を盡す上から言へば甚だ不都合である、何故ならば國民は錦々獨立して一家を經營して家業を嗣んでこそ其家が圓滿に治まるのである、一家圓滿にして他人との交際亦圓滿になり、社會も圓滿國も圓滿になる、昔の婆羅門教にも恰度同じ様な弊害があつた、始め婆羅門教には難行苦行を修める爲め或る時期の間乞食をする定めであつたが、夫れを穿き違へて遂に乞食でなければ僧侶でなく、乞食でなければ極樂に行かれぬと考へて皆乞食になつて仕舞つた、難行苦行も修養の爲めとしては一時乞食になることも宜からうが、全然乞食になつ

て仕舞つてはそれで以て天國や極樂へ行ける譯のものではなく、又國民としての義務を果すことも出来ない、金を皆出して仕舞つたり乞食みたになつたりして納税の義務や兵役の義務を盡すことが出来ませうか、そんな宗教に依つては決して我國の國民性を教養することとは出来ないのである、故に我國國民性の特色たる忠君愛國の念を益々培養し、兼て家庭の圓滿を期し、何處に於ても何人を問はず萬遍なく行はれる八面玲瓏の宗教でなければ國體に合致する本當の生きた宗教とは言へない、國家の繁榮は各個人の奮勵努力に基くものであるが、個人の上に於ても此の進歩的の世の中に處して行くには、厭世的悲觀的女性的消極的の宗教では駄目である、茲に於てか私は奮闘と努力と活動とを標榜せる宗教即ち日蓮主義を廣宣流布せしめ、大にしては國家國民性の向上發展を計り、小にしては個人生活の充實と安穩とを期することを切望して已まないのであります。



## 讀者訪問録

三上白碧

## 竹内豊子女史

を本郷五丁目の閑居に訪ふ、丁度婦人の來賓が二組ほどあつたが、マア能く入らつしやいましたサアドウゾと云ふ氣持のよい挨拶、實直らしい女中に案内せられて離座敷四疊半の客となつた。佛壇には綺麗な花が供へられてある。床の間には

みがかずは玉も鏡もなにかせん

學びの道もかくぞ有けれ

との御歌を拜するのみで、室内には少しも俗的の裝飾がない、何だか奥床しい様な感に打たれた、記者は信仰發心の動機などを尋ねた、女史云はく

妾は金澤の生れてありまして、幼少の折母に連れられて優陀那日輝上人の説教を聴聞致しましたが、其當時は子供ではあるし信心の大切な事は氣が付きません居りました、後、種々世の中の實際に當りて見え

すると、自分獨りの考へては、心を安んじてその仕事に盡すと云ふことは六ヶ敷い、中々一ツの事でも貫くと云ふことは容易でないことを覺りました。それから日蓮上人の御傳記などを拜讀致しますると、誠に深い思召して感動することが強くなりまして、詳しくは分りませんが、信仰は人として第一の實である

と云ふ事が、身に泌み、と難有くなつて参つたのであります。妾は、三年前迄は女子高等師範校に居りました、が、左様、多くの婦人は宗教に就ては少しも心を用へて居りません、宗教信仰の缺けて居る婦人の家庭は誠に寂しい氣分に充たされて居りはせぬかと思はれます、家庭は賑やてなければいけません。この家庭の良妻を養成する教育者は、廣い意味の宗教を尊敬する考、がなければならぬと存じますが、案外信仰と云ふ事に就ては人事の様にして居るのであります、さう云ふ人格でありますから間違が起るのであります。

妾は一人でも信仰に這入る方があればと思ひまして月二回程山田一英師を御依頼して、法華經の講義をうかと施本の相談をうけた、施本、これが、簡易な文章によりて未信の人々を信仰に引き入れると云ふことは中々に六ヶ敷い、從來の施本の種類は多いけれども、内容があまりに豊富で複雑で了解するに苦しむ、是まで、施本に就ては記者の苦心する所、なるべく文字數は少なくて其意味の徹底するものでなければならぬ、さう云ふ方針で書いて見ようと思つたので、快よくその施本の執筆出版一切を引き受けた、床の間の時計は二時を過ぎた、あまり永居は禮を失するから、暇を告げて歸らうとすると、可愛さかりの孫さんが遊んで居つた。

## 本所區長岡田淳司君

を區役所に訪ふ、受付に刺を通ずると、來客があり、ますから少し御待ち下さいと云ふので、待ちながら職員執務模様を觀て居つた。此間五分時、正面の區長室の扉が開いたかとおもふと、岡田區長自身に出て來られて、失禮しましたドウゾと云ふ挨拶につれられ

願ひました、始めは上野高等女學校の教師學生を集めたのであります、現在は、妾の御手傳をして居る女子専門學校の生徒が聴きに参ります、中には眞面目に難有く聴いて居る人もありますから、心に落付く處があるてしよう、家庭に宗教の信仰がなければ優しい奥床しい家庭は作れない事と信じますと淑やかな謙遜の態度を以て語らるゝ所、女史が婦人と精神修養の關係に就て、いかに骨を折つて居らるゝかを分る、女史さらに語を轉じて

どうか一時も早く御祖師様の難有い思召しが通じまして皆様方の家庭に信仰の聲が響きます様に、朝夕の勤行の折に念じて居る次第であります。

妾の父は慶應二年に亡くなりましてしたので、丁度この八月二十五日が五十回忌に當るのであります。過般身延山へ参詣致して御回向をして頂きましたが、父の菩提供養のために、何か分り易い御法話を施本として知合の方に分けたいと思ひますが、如何て御座いませ



て、區長室の椅子に腰を下した、さしがは日本都市の行政に參與するほどありて角のない圓滿なる應接振り何となく打ち解けた様な態度、中々に修養を積んだものだ、それが區民を統御する秘密神通の力であらう、成る程實際の問題には理窟よりも其人格である、人の揚足を取つたり自分の言責を無視して顧みない様なもの、人一人としての權威がないから衆望は集まるものでない、自分だけが一番理窟が解つて偉磊と自惚れて居ると、自然にその所謂偉磊のが禍して立つことの出来ない破目になる、それが眞理の制敗である、内省と修養とはこゝだなど云ふことを感じた、區長室の書棚には全國都市の市政に關する統計書籍のある中に法華經講義がある、それが頗る異彩を放つて居る、恐らく何處の役所へ行つても、斯う云ふ有力なる修養資料を備へては居るまい、記者は毎に 思想第一の寶典たる法華經を個人は勿論、官衙學校等に備ふべきことを主張して居るの

々がいかにか肉感的生活を送つて居るから分る、自分は國家風教の上に、又國民の健康を維持する上に、眞に重大なる問題ではあるまいかと考へて居るのであります、何はさて、斯う生活上の壓迫が劇しくなつては無職業者が殖えて來て善からぬ事をするので困る、いよゝ生活を續けることの出来ないものは、宿もなければ飯も食えないので行路病者となる、大正三年一月より四年の六月三十日までで當所て取扱つた行路病者だけでも、六百五十二人ある、其内死亡したのが、百六十三人ある。それから棄兒が十二人、迷兒が四十人、遺兒が七人と云ふ驚くべき統計を示して居ります。兎に角こゝ云ふ悲惨なる出來事が多いと云ふことは、國家文明の爲に憂慮に堪えざる事實でありますから、先覺者は何とか之が防止の方法を講ぜねばなるまいと思ひます。と談話を續けて居つた最中、六七名の訪問者が來たので、獨りて時間を占領しては公徳に觸れる處から、さらばと別れを告げて區役所を去つた。

であるが本所區役所に於て其意見が實行されて居つたので、何とも言へぬ満足なる氣分に打たれた、岡田區長云はく

區と云ふものの施政の範圍は中々廣いものですよ、何しても二十萬六千の人口があるのですもの、それに大部分は勞働者ですから、何事でも懇切に呑み込む様に處理して行かねばなりません、自分としては日蓮上人の如き精力主義者を標準として進む積りでありますが、段々と修養上の御話しを拜聴して考を練りたゝと思つて居ります、サア、現代は生活問題の研究は盛んであります、職工勞働者の多く住んで居る本所區の如きは、其實際生活の競争の劇しいことは想像の出來ぬほどで、丸て修羅の巷に餓鬼の生活を送つて居る有様であります、此區には大小の工場が多い、従つて職業の種類なども奇なるものがある。特に社會政策上注目すべきはルーデサック製造の盛んなことである、この現象は、公けなる衛生上の要求からでない様で、裏の方面より來る需要らしい、之に依つて今の人

日蓮正宗法道會

を深川東元町に訪ふ、舊知ではないが折よく早瀬主任が居られたので、案内せらるゝまゝ遠慮もなく奥座敷へと通つた。教會は明治三十五年大石日應師の創立する所、信徒の葬式法要の儀式を行ふは勿論、月一回の講演を開いて居る、三百人位の収容力はある、立派な教會だ唯だ惜むらくは地の理が悪い、若しこの教會が地の利を得て居つたらば、傳道の上に多大の効果を收め大發展が出來るとおもふ、相對して語る所十年知巴の如く、談はそれよりそれへと進み、刻下教團の案件たる統合問題に及び、之が實現を期するには政略を用ゆべからざるを斷じ、布教に關する方策など交換して居るうちに、晝食の馳走を濟し、日宗教團の上に教育機關の提擧實行などに就て、互に所懐を披瀝して時の移るをも知らざりしが、時計三點を報じたので、自分ながらあまりの永居に驚いて同會を辭した。



# 三大秘法抄綱要

(續)

(日蓮主義の特質に伴ひ、其研究益々盛也、研究者は直に日蓮上人の教書に就て安んずる大思想に接せられんことを望む)

凡そ佛教として釋迦牟尼を崇敬せざるものありとせば、是れ即ち佛教に敵するものである。佛教の本源は佛陀に存せること明白であつて、一點の疑を容るべき餘地がないのであります。

無始實在の本佛、意輪(慈悲)、身輪(出現)、口輪(說法)と云ふ關係を見ますれば、教主釋尊に對する意識は透明なることであると信ずる、之等深遠なる秘密は、小乘權大乘に於て説く可らざる故に説なかつたのである、法華經に於て始めて大宇宙の秘密を光顯し得て佛教信仰の中心生命となり、而して人類救済の源泉は、釋迦牟尼の三輪に憑らざれば、眞實に其目的を遂行する事が出来ない、故に日蓮人は佛教各宗の佛身

觀を評して、「諸宗は本尊にまじとへり」と判決を下されたのである。斯の如く佛教の中心たる本尊は、法華經壽量品の思想に依りて始めて明確になるのであります。

「壽量品三所建立一本尊、者五百塵點當初以來此土有緣深厚本有無作三身教主釋尊是也」

この本尊明かになると共に修行が定るのである、修行には南無妙法蓮華經である、この題目は一切の思想を統一せんとする理想である、題目に正像と末法との二意がある、正法には天親龍樹なども題目を唱へられなければども自行のみでありました、像法には南岳天台が之を唱へたけれども、又同じく自行のみにして廣く

他の爲に説く所がない、所謂單なる理觀の題目であつた、今濤季の末法に於て日蓮が唱ふる題目は自行化他に亘りて修行する題目である、理觀でない事行である、修行の統一である、佛教の最善形式を纏めたる修行の題目である、而して其形式は五重玄を以て組織せられ、内容頗る豊富である。

「入二末法一今日蓮が所唱題目、異二前代一且二自行化他二南無妙法蓮華經也。名體宗用教二五重玄一五字也」

若し之に反對するものあらば一代藏經を讀破して、新しき發見の下に主張を爲すべきであるが、上人が本化上行の自覺に立つて光顯したる最善形式に向つて、佛教徒中異議を唱ふることは出来ないと思ふ。次に戒壇論に於ては、之れ實に宏遠なる理想に依て論道せられたるもの、日蓮主義の各宗教に超越せる所以亦茲に存するのである。

「王法冥ニ佛法ニ佛法合ニ王法ニ王臣一同に本門三  
大秘密の法を持て云云」

王法とは國法である、天皇に基いて起る國家の理想目的である、此の理想目的を遂行する上に、天皇の神聖なる權力がある、佛法は平等に人類を救済せんがため理想目的である、王法と佛法を一致冥合して兩者の理想目的を遂行する、國家に理想あるも佛法に之を一致冥合すべき點がないならば、冥合の事實を見ることは出来ないが、國家の上にも宗教の上にも、共に遠大なる理想の存するならば冥合の實は擧がるべきである、教は世界的であるから對立的の國と一致し得るものでないと思ふ、其は國を輕視して居る思想である、我日本の理想を理解せざるものである、佛教本來の理想とは確實に契合し得る點がある。この日本の崇高なる思想と佛教中の四恩報答の秩序的思想和は當然冥合せなければならぬ、故に王法の權威に服すると共に亦一同に本門の三大秘法を信念奉行するの態度に出でねばならぬ、日蓮上人は大涅槃經に説かれた例を引いて有徳王と覺徳比丘との關係を擧げられた、それは覺徳比丘の熱心なる布教傳道に對して多くの障礙なる



俗泰僧侶が反抗して苦された時に、有徳王は權力を以て覺徳比丘の正義を擁護し、比丘をして自由に猛烈に宗教上の運動を爲さしめたのであるが、當年の思想態度を未法の現代及將來に實現し、正法の威力を以て佛法の目的を達し得べき時には、天皇勅命を下して日本國內に於ける靈山淨土にも、似たらん最勝の地を選んで、本門の大戒壇を建立すべきであつて、蓋し之れ時を待つべきである、之れ王法の威力を尊敬する大精神より出たのであるとおもふ、故に上人の主張は一人一人の局部的道徳でなく、團體改良主義である、團體的計画である、若し國家が徳教の中心を立て、國士を莊嚴する様になれば、其土は穢れたるものではなくして靈地となる、この靈地を踏めば心自ら清められるので多數の人を一例に清める方法である、それは日本人のみでなく、世界中の人が悉く本門戒壇に參拜して、自己の罪障を悔へ改める戒法であるのは勿論大梵帝釋等も來下して翊み給ふ所の聖壇でありまして、崇高にして神聖なる戒壇である、此の事の戒壇建

立せられた上は、迹門の理性戒及び四十二年所説の戒は何等の益あるべきものでない、傳教大師叡山創建の當時は法華戒の神聖を發揮したりしも、慈覺智證等は傳教の眞意に背いて、一個の私見を加へ、叡山の戒壇を破壊して遂には戲論なりとまで嘲りて中道の妙戒を打捨つるに至つたので、佛敎の滯濁其極に達して國民風敎の中心に失せ、人心何れに歸向すべきかに迷ふの有様とはなつたのである、この國家及人生の根底基本たる敎の紛亂は、直接其大なる影響を與ふるので、正邪偏圓を明かにするのは思想家の重大任務である、則ち「此法門は義を案じて理をつまびらかにせよ」と仰せられたるは、眞に千古不朽の權威あるを認むるのである、佛敎の正邪を判定し來れば、法華經以外の敎説は悉く偏を帯び權を兼ねたるものであつて、法華經本門のみ眞實醍醐の敎である、この本門に於て顯示し給へる三大秘法は、地涌千界の上首にして獨り日蓮之を相承したるものなるを以て、靈山會上の稟承をのまゝが三大秘法である、本佛の委託を享けたる所弘

の法である、この大法宣傳の全權を有する日蓮は、諸經の優劣を批判して取舍を行ひ、宗教の理想と國家の目的とを接觸冥合せしめ、國法の威力によりて大法の廣宣流布を期し、大法の權威を以て國の理想を實現せしむるが爲に、猛烈なる献身的な大運動を敢てせられたのである、然れども斯に注意すべきは、一念三千に二種あることを忘れてはならぬ、即ち天台の弘めたる必然理性の一念三千と、佛界緣起の事の一念三千である日蓮主義は本門壽量品に依て宗旨を立つるものであるから、必然的理具の一念三千を採用せざるは明かである、正しく本門壽量品の一念三千である、この法門宣傳の任務を負ふのは吾身日蓮であると云ふ大自覺に立たれたのであります、故に本文に「今日蓮が時、盛んに此法門廣宣流布する也」と述べられて居る、而して法華經が釋尊降誕の一大事因縁であると云ふは、何が故であるか、即ち整束せる客體の本尊と吾等が發現の修行と、教法と國家社會との發展に關する微妙なる理義關係に就て、あらゆる一切經に之を説かず、獨り

法華經に於てこの大法門が明かに顯示せられたる故である、この三大法門頭はれずんば、一代佛敎の中心を失ふのみならず、人類思想の最後歸結を與ふることが出来ない、法華經あり三大秘法あり、始めて人類は徹底的に救濟せらるゝのである、斯かる大事の法門であるから、之を記述して置かなかつたときは、將來宗教の指針に迷を生じて嘆くものもあるべしと存じ、救濟の慈念禁ずるを得ずして本書を認めて後代に遺さんがため、本書は從來多くの宗教學者が文字章句の末節を捉へて議論を構成して居るのであります、啓蒙や健抄の訓詁註釋を以て日蓮主義の大思想は理解し得らるゝものでない、日蓮研究者は之等の説に頼る事なく直に本書を拜讀して、上人の大慈懷に入り、公正に之を玩味し、堂々たる大上人の主張に進み、その眞意の存する所に接觸する事が大事であると信じます。(完)







不思議なる心  
 人の話  
 ▲二十日小學生及幼稚一般公衆に講演  
 清き生活とは  
 ▲廿三日夜山武郡東金町妙福寺開講  
 開會の結  
 ▲廿四日茨城町道路布教開山田誠心竹内顯  
 領吉井光出演す  
 ▲同日山武郡土氣本郷本壽寺に開講  
 日蓮主義と菩薩教  
 統合と菩薩の覚悟  
 奮闘主義と法華經  
 法華の明鏡  
 ▲同日山武郡岳村東成寺 明治天皇陛下三周  
 年記念法要並講演執行  
 御道徳讃  
 ▲廿一日夜長生郡上太田道祖神祭の幸概を利  
 用して大道布教を試む吉井光秋葉純一富田  
 林惠出演す

**坂本大僧正遷化**

宗門の碩學とし習學者の  
 崇敬せる坂本大僧正遷化  
 せらる痛悼何ぞ堪へん茲に教徳文を掲げて上  
 人の行跡を慕はん  
 謹而奉勸請南無本門常住の三寶諸尊來臨影  
 響悉知照覽  
 伏而惟るに應點久遠の大悲は三五七九の迷  
 衆を救ひ菩薩願本の大真業は徳海垢眞の狂  
 兒を治す本佛無窮の妙事王無邊の妙力眞に  
 測量すべからざるもの乎山門今日内外を洒

て上人の成して未だ遂げざる事業の後事を  
 全ふすべく道安は出て、關本法寺の現住た  
 り其體孫弟二三亦皆眞率に行學を怠らざ上  
 人の道統法系永へに盛ふべし特に上人が維  
 新革新の志を冀げて時代急潮流に上人が維  
 新の維持に苦心せし我が教團は今や管長其人  
 を得て統率機宜に契ひ威風堂々旭日昇天の  
 勢ひもて御門下統合の中堅となり活躍飛騰  
 しつゝあり上人亦以て瞑すべきなり  
 上人老て益々謙遜宗運の今より層層の發展  
 を見るべく堪えられしも常命限りあり春來微  
 恙を感じ仰臥幾月餘るに後事を徒弟に託し  
 て大正四年六月廿五日午前六時三十五分安  
 祥として化を他界に遷さる世壽九十一法臘  
 七十六  
 惟ふに上人の靈今や寂光華頂月朗かなる所本  
 佛の慈顔に接し無所闕林華鮮かなる邊り自受  
 法樂の悦びに満され給ふべし歎徳一章仍而如  
 件  
 維是大正四年四月歲在乙卯七月初一  
 法類代表 淺草慶印寺現董沙門  
 齋正山根日東 敬白  
 ▲八月六日夜山武郡白里村北今泉上代別荘に  
 大講演を開き長美明會上摩榮鈴木正二花澤  
 摩泰伊保内教守徳會廣土屋眞容諸師講演せり

辯し香華を供獻し茶しく管長大僧正本多日  
 生現下を屈請し醍醐一貫の梵進を張る意趣  
 如何となれば前管長大僧正坂本日桓老上人  
 の本葬の式典を擧ぐるものなり  
 状を案するに上人諱は日桓字は親曾眞諦院  
 と號す東都麻布の人坂本清次郎の二男文政  
 八年三月廿八日を以て生る天保十一年十月  
 十三日年甫めて十六南總押日來光寺日題に  
 師事して難髮染衣し爾來宮谷檀林に蒙露の  
 勞苦を積むて前後二十年明治二年玄講寮  
 主に進む明治五年八月教導職試補十一級に  
 六年二月少講義に同年十一月中講義に七  
 年十一月權大講義に八年五月大講義に同年  
 十二月權少教正に叙せられ越へて三月号く  
 少教正に十一月十二月中教正に十四年四  
 月權大教正に廿年一月大僧正に昇進せらる  
 寺院經營の方面に至りては天保十三年三月  
 押日紫雲寺住職に嘉永元年九月國府里廣福  
 寺住職に文久二年十一月生實本壽寺に晉職  
 明治十一年七月管長として總本山妙滿寺に  
 晉山十一月生實本壽寺を弟子無着に  
 譲り開拓の身となり靜に老を養ふ廿二年一  
 宗の公選に依りて再び管長の榮職に就き總  
 本山妙滿寺を董督す三十七年大に感ずる所  
 あり我ら進んで開闢滅盡の場場會津妙法寺  
 の住職となり老耄を擬し弟子無着を責して  
 拮据經營弱本山の慶願を復舊し畢ぬ  
 若し夫れ公職に従事せられし點を檢するに  
 明治六年九月合併大教院の命に依り教導宣  
 布の爲め諸國運教を始めとして七年四月千

**暑中御伺**

錦製美縫織物  
 海製染衣  
 水引打敷  
 莊嚴佛具  
 御袈裟衣莊嚴佛具調進處  
 敝舖從事斯業有年經驗  
 與信用爲世人所同認乞  
 就本舖製品一實見之

錦金襴美縫織物並被布、コート、改良服、布教法衣  
 袴、通用帽被賣本舖  
 京都市鳥丸通五條一丁下ル  
 土川法衣店  
 電話(下)  
 振替口座 大阪六五〇番  
 振替口座 東京三三七番

業縣下派内教導職取締に同年七月千葉縣管  
 内教導取締に九年三月千葉城兩縣教導取締  
 事務に十一月廿九日より十五年十一  
 月に至る五ヶ年間妙滿寺派管長に廿二年二  
 月一派公會原案起草顧問に同年五月第二教  
 區宗會議員に同年九月再び選ばれて一派の  
 管長に廿五年十月大學特別講師に三十六  
 年一月高等宗學院特別講師に就任せられ其  
 他教學に邁あらず  
 上人責任勝進にて剛直日夜讀書に勵精して  
 眼を強當の教觀に晒し身を持すること極め  
 て堅實にして才陰猶ほ之を空くするを容さ  
 らず通經唱題日課幾萬部以て其信念を推知す  
 べし風誦草講義十法界抄當體義抄私見信行  
 要道義講義事觀信行要等聖教の移華執筆の  
 教書幾十冊以て其遺著を窺ふに足る特に理  
 財の術に長じて善積せし所謂衣鉢の餘財勢  
 からず而も之を無意義の事に費消せずして  
 總本山大學林及會津見附の靈跡保存に抛ち  
 若しくは因縁淺からざる國府里廣福寺の資  
 堂に水陸救濟會赤十字社慈善化救濟事業に喜  
 捨せし等他善行美事接指するに邁あらず  
 特に老後全身心を會津妙法寺の再建事業に  
 傾注して親ら數千金を抛ち十方縑素の監贊  
 の下に略に直觀に復するを得たる其道念の  
 進發眞に未代希有の勝妙事と謂ふべきなり  
 宜なり宗門の上人に一等功勞章を特授せし  
 事や  
 徒弟智龍は天折せしといへども權僧正竹内  
 無着權大學統松井道安は健全なり無着は本  
 滿寺を董すと共に會津妙法寺の後任者とし

**千有餘座之布教師著**

本化 大説教書全  
 妙宗  
 定價金五十錢 送料金四錢  
 初めて世に出てたる説教書  
 本書は法學經專門古今無及の説教書にして内  
 容は立正安國論御書の大説教を初め幾數坐の  
 説教は法學因縁く具足し殊に悲話快話滑稽等  
 因縁澤山批評並其雜用等遺憾なき其書也

御園寶典 完  
 定價金四十錢 送料二錢  
 從來の御園書に缺點多きが爲に本書出て本書  
 は第一病者の事其病性及び障礙靈藥の事も出  
 らかに吉凶を確かならしめ又漁業の事大小有  
 無等一切出て一々來者に満足を與ふる無二の  
 寶典也  
 後志國古平郡古平町三三六三  
 北天教光社  
 振替口座東京四七五二番



# 天晴會講演録 第三輯

定價金壹圓五拾錢  
 本文約八百頁  
 總クオース上製美本日蓮上人御尊像及講演會寫真入り  
 送内 地拾貳錢料 朝鮮滿洲臺灣 四拾錢

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凜乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間の全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし

▲讀むべし 本書を讀むべし 本書は人格完成の好資料也

内容 ■ 師崎文學博士。本多大僧正。小原陸軍少將。松森權僧正。箕作法學博士。藤田大僧正。山田法學博士。柴田慶大教授。井村權僧正。小林文學士。石橋中將。笹川文學士。箕博。山根僧正。

▲本書を座右に措くは自己を莊嚴するもの也購買の機は今也

發賣所

東京市小石川區  
 白山前町十七

三上

義徹

振替口座東京二八八四〇番

日宗法衣専門  
 青雲帽 希教服 袴  
 此外法衣付屬品一切

京都佛具屋町五条  
 飯田法衣店

振替大阪六八四七

小店調製の品は價格低廉品質純良且裁縫精巧等は勿論殊に格好の尊嚴に至つては到底他店の模倣を許さざる自然の特徴を有し候  
 小店は御注文の御素志に反する如き不手際不親切等は斷じて無之御申越次第御満足迄誠意見本を提供し萬遺憾なからん事に期し居り候

本誌の定價

廣告料

雜誌料

▲一部郵税共金六錢五厘○半年分金參拾九錢一ケ年金七拾八錢。新購讀者は前金拂込されば發送せず  
 表紙うら。うら表紙一頁金拾圓半頁六圓。普通廣告欄は一頁金七圓半頁四圓希望の者は紹介の事  
 東京小石川白山前町十七番地三上義徹振替口座東京二八八四〇番へ  
 送込むべきこと

▲交換——新聞雜誌。新刊書の寄贈其他申込及編輯に關する用件は必ず編輯所へ御送附の程願上候

大正四年八月十五日印刷發行

發行兼編輯人 東京市小石川區白山前町十七番地 三上義徹  
 印刷人 鈴木日雄

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 統一團  
 編輯所 東京市小石川區白山前町十七番地



# 統

## 日蓮門下七教團 統合大講習會 講演集

定價金壹圓五拾錢  
本文約一千頁以上  
講習會參列者寫真入り  
送料(内地) 十二錢  
(朝鮮、滿洲、臺灣) 四十錢

日本國體の根本義を説明せるは法華經にして之を活釋し發揮したるは大聖日蓮の外には一人もあらざる也大聖日蓮は宇宙及人生に起る一切の問題を解決すべき使命を帯び特に大日本帝國を撰んで人間として生れし也大聖日蓮の活生存在は大に日本歴史の眞價を高むる所以なるを知らざる可らず日本國民にして之を知らざれば歴史を解せざるものと謂ふべし大聖日蓮に委を膺してより將に七百年其の宗教的思想の系統を繼承せる日蓮門下各教團は今現に事實に分裂を去つて統合の新記録成らんとす先づ第一事業として東京に大講習會を開けり本書は各教團の思想に對して徹底的理解を要す未だ大聖日蓮の大人格大思想に接するの幸榮を擲けざるものは何事かを差し措いても奮て本書を讀まざる可らず

### 内容

教團融合論、國柱會總裁田中智學君。教表の統合に就て、僧正井村日成師。統合に關する意見、大僧正本多日生師。五義三法、國柱會總裁山川智應君。統合近世史實、權大僧正藤田亮淳師。時局と統合、高島平三郎君。基督教徒の統合運動、マスタナーガアーツ柴田一龍師。國家と宗教、法學博士山田三真君。日蓮主義より觀たる神學及科學、文學士小林一郎君。現代と道德、文學士吉田靜致君。國民道德に就て、文學士深作安文君。日本國民の自覺、海軍少將佐藤藤太郎君。世界政策小史、文學博士箕作元八君。日本佛教史、境野黃洋君。儒教と佛教、文學博士井上哲治郎君。惟神道に就て、法學博士寛克彦君。觀心本尊抄解題、清水梁山師。本尊の統一、僧正嶋村日正師。如說修行抄義、菩薩主義、僧正野口日主師。日蓮本佛論、大僧正阿都日正師。本化行學の指針、權僧正松森靈運師。善意品大觀、權僧正關田日城師。

### 發行所

東京芝區二本榎町一ノ一八

### 販賣所

東京小石川白山前町十七

### 統 合 事 務 所

三 上 義 徹  
振替東京二八八四〇番

▲發行期日 目下印刷校正中。九月五日發行

(東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舎印行)

### 信仰と開化

大僧正 旭 日苗

### 法華の大道を諦達せよ

記者

### 時局と國 民の覺悟

文學博士 白鳥 庫吉

### 道德と信仰の契合

三上 義 徹